

技術継承の場としての大学

身延山大学
ラオス仏像修復プロジェクト
意欲ある「シニア学生」も

山梨県身延町にある身延山大学(望月海慧学長)は、日蓮宗の総本山・久遠寺に隣接する。学生数1000人超の小規模大学ではあるが、四半世紀にわたって国際的な文化貢献を続けている。それが「ラオス仏像修復プロジェクト」である。プロジェクトリーダーを務めるのは、国際日蓮学研究所の鈴木義孝特任講師。仏師であり僧侶でもある鈴木講師に、仏像修復の取り組み、ラオス人民民主共和国政府との事業、そして日本の仏教美術が直面する課題について語ってもらった。

鈴木講師に聞く

〇2つの仏像修復哲学
仏像修復には大きく分けて2つの潮流がある。

「1つは保存修復です。これはオリジナルをそのまま残すという美術的視点を重視します。例えば、後世に付け足した部分は剥がし、欠損箇所もそのままにすることが多い。そしてもう1つは、伝統的な仏具屋や職人が行う修復です。古い層をすべて剥がし、ピカピカに塗り直して新品同様にする信仰的視点。本学は、これらの中間に位置するハイブリッド方式と言えます。信仰の対象物、拝む対象としてはやはり完全なものの方が良いと考えています」。

さらに同大学では、金箔が不自然に輝きすぎな

関係は、時系列で見るとその厚みがわかる。

きっかけは1995年まで遡る。日蓮宗寺院で活動するBAC仏教救援センターの伊藤佳通師が、ラオス・ルアンパバーンにある寺院の無数の仏像が荒廃の危機にあると報告した。2000年、鈴木講師の師にあたる柳本伊左雄教授が準備調査をした結果、現地には修復技術も工房も存在しなかった。

2001年9月、同大学はラオス政府と協定を締結し、正式にプロジェクトが始動。当初はルアンパバーンの世界遺産地区にある35の寺院を対象とした。2002年から2005年にかけて、調査チームは1174体の仏像の存在を明らかにし、「全寺院仏像基本台帳」を作成、ラオス政府

に提出した。

2009年には、大きな転換点を迎える。

首都ヴィエンチャンのラオス国立美術工芸大学の教員らに日本側が修復技術を伝承する体制を整えた。2011年、プロジェクトは10周年を迎え、王宮博物館で展覧会を開催した。この時期、日本国内ではラオス仏像修復サポーターズクラブが発足し、支援の輪が広がった。

2018年には、最新技術である3Dスキャナーを導入。これにより、仏像の正確な形状データを保存し、盗難対策やレプリカ制作に活用する道が開けた。その後、コロナ禍による中断を余儀なくされたが、交流は途絶えなかった。

そして、2023年末活動は新たなフェーズに入った。ルアンパバーンだけでなく、ヴィエンチャンの有名寺院で予備調査を開始した。2024年には、身延山大学、ラオス国立工芸美術大学、ラオス情報文化観光省遺産局の三者が、ラオス全

土の仏像調査に関する新協定に調印した。現在、実際の修復作業は、育ってきたラオス人チームに任せ、日本人は広域調査や最新技術による支援に注力している。

〇伝統素材「カモク」
プロジェクトでは科学的な共同研究にも発展している。ラオスには、漆に菩提樹の灰を混ぜたカモクという伝統的なバチがある。仏像の螺髪や細部装飾の成形に欠かせない素材だ。このカモクの

「住職さんは涙を流して喜んでいました。直した仏像を返しに行った時の皆さんの喜びの笑顔を見ることが、学生にとっても最大の学びになりました」。



鈴木義孝特任講師

製造方法を科学的に解析すると、漆を一定の温度で加熱し、灰の配合比を最適化することで、乾燥が速く、ひび割れしにくくなることが分かった。

その後も伝統的なセメント素材や顔料の調査を続けるなど、ラオスの文化を支える素材の知を再構築しているのである。

寺院仏像修復チームが組織された。鈴木講師はこの中心メンバーで、石川県輪島市や珠洲市の被災寺院5か所を訪問し、がれきの中からバラバラになった仏像や破片を回収した。珠洲市の本住寺では日蓮聖人像を仮組みした。

在は新しい希望でもあり、またね。定年退職後に「社会の役に立ちたい」と入学してくる皆さんは、若い学生よりもやる気が高いことが多い。経験豊富な彼らが、大人しい若者と一緒に活動することで、お互いに感化されて変わっていったいます」。

インバウンド観光客への活用も視野に入れる。特に身延の宿坊に滞在しての仏像作成体験は高い価値がある。こうしたワークショップの需要も今後さらに見込まれるはず、と述べる。

とはいえ、プロジェクトには常に資金と発信力が付きまとう。どれほど価値のある活動をしていても、それが世間に伝わらなければ学生確保も寄付金募集も困難になるだろう。今後はメディアへの露出やSNSでの発信を強化し、例えば、定年後の生きがいづくりの場としての認知度を上げる必要がある。

鈴木特任講師は「ラオスへ、他国へ学びに行く場所ではなく、周辺のタイやベトナムから修復を学びに来ような、東南アジアの仏像修復センターにしたい」と展望する。

ではない。拝む対象を修復することで人々の信仰を支え、技術を次世代に託す心の継承である。大学という研究機関だからこそできる、息の長い社会貢献のモデルがここにある。